

NOVEL
ヤミヨ
ILLUST 8000

VICE SAVER SHION

ヴァイスセーバー 三犬

牝犬に墮とされた変身ヒロイン

試し読み版

18
未 満

二次元ドリームノベルズ

プロローグ	
一章	魔犬憑依
二章	発情の牝犬戦士
三章	敗辱の犬耳少女
四章	汚辱の犬耳戦士
最終章	牝犬ヒロイン
エピローグ	

かみぎく
袖菊しおん

科学者の母を悪魔に殺され、自分のような悲しみをこれ以上増やしたくない思からヴァイスセイバー・シオンへと変身して孤独に戦う少女。見た目はクールだが、困っている人を放っておけない優しい性格。

**VICE SAVER
SET UP!**



**VICE SAVER SHION
登場人物紹介
CHARACTERS**

プリムラ

幼い少女の見た目をした悪魔。天真爛漫故に残酷なことですら平気で行う。人の心を操るのが得意なのと無類の動物好きであり、悪魔を狩るシオン使って自分のペットを増やせないかと画策する。

だ。いや、もつと敏感といつても過言ではない。

「はふっ、あつ、ああ……、な、なんで……、し、尻尾……ふううう〜ッ!!」

そんな新たな性感帯を粘液で濡れた触手たちがヌチャヌチャと擦り上げれば、思わず意識がそちらに向いてしまう。しかし、それがいけなかった。尻尾へと意識を向けてしまったことよって、余計に刺激を強く感じてしまう。

そして、刺激は快感へと変わり、さらに尻尾へと変身少女の注意が向いてしまう。それはまさにシオンにとつては負の連鎖だ。

「んはっ、ああ……む、胸にも……くっ、や、やめる……そんな、とこ……お……ッ!」

新たな性感帯からの身体全体へ広がっていく悦楽、それに必死に抗おうとするシオン。そんな彼女の抵抗心を砕くかのように、魔獣たちは新たな行動に始める。

シオンの四肢を拘束していた触手が一齐に動き出し、細い手足に巻き付きながら進行を開始する。二の腕まで巻き付いた肉紐は変身少女が抵抗する度に揺れるDカップの胸へと狙いを定めると、乳房にとぐろを巻き、ギユウ、ギユウと豊かな肉鞠を揉み解す。

「ひ、人の……胸で……あ、遊ぶ、な……あ……ひっ! き、気持ち……わ、悪い……イ……んっ、ああ……」

まるで胸の柔らかさを楽しむように動いたかと思えば、今度は力を抜いて弾力や張りを確かめ、触手たちは緩急をつけながら彼女の胸を責め続けていく。

「はう……うう……、ひゃっ！　ちよ、ちよつとどこ舐めて……あつ、んんん〜ッ！」
胸へと意識が向いている間に、彼女の美脚に巻き付きながら上ってきた触手が内腿を撫で上げる。直接肌に感じた触手の嫌な感触に、変身少女は思わずブルリと震え上がった。

「粘ついて……き、気持ち悪い……それに……なんて臭い……なの……」

ベチョッと水飴のように肌に絡み付き、糸を引く粘液の嫌な感触にゾワゾワと産毛が逆立つ。それに臭いもきつい。鼻を突くような生臭い臭いが触手への不快感に拍車を掛ける。

——き、汚い粘液が身体に……くっ、き、気持ち悪い……ッ！

そんな少女の不快感をさらに煽るように、触手たちはねつとりとした粘液で白い肌を汚辱しながらさらに上へと昇り侵略範囲を広げていく。変身衣装に包まれたお尻をまるで舐めるように触手の先端で撫で始めた。

「はあ……はあ……、い、いい加減に……んっ、ぐう……うう……」

魔獣たちに身体をいのように弄ばれ、ふつふつと怒りが沸いてくる。しかし、そんな彼女を挑発するように新たに伸びた触手がシオンの頬を撫で上げ、ネチャアと変身少女の美貌に糸を引く粘液を擦り付けてくる。

「こ、この……ッ、あんっ、ま、また……尻尾を……、きやつ、きやあああああッ！」

魔獣たちの挑発に怒りに火を付けられ、再び身体に力を込めて触手を引つ張ろうとする変身少女。しかし、彼女が力を込めた瞬間、それを見計らったかのように触手が犬尻尾を

扱き上げる。強烈な激感に集中力を乱され力が抜けると、タイミングを合わせたように腕に絡み付いた触手に前方にギュッと引つ張られた。

「うぐっ！ し、しま……あつ、こ、こんな格好……、くっ、は、放しな……さい……ッ！」
力が抜けた瞬間に合わせてバランスを崩され、シオンはそのまま前に倒れてしまった。体勢を崩した変身少女にすかさず悪魔たちの触手が群がる。彼女の四肢をまるで地面に縫い付けるかのように拘束し、気高きヒロインに四つん這いの体勢を強要する。

ムニユッとDカップの美巨乳が縛られた両腕に挟まれ、より扇情的に強調させられてしまう。触手に弄られたことよってレオタードスーツが食い込んだお尻を突き出した格好は彼女に生えた犬耳や犬尻尾も相まって本当の犬のようだ。

——な、なんで……尻尾……動いちやうの……ッ!?

あまりにも恥ずかしく屈辱的な格好に怒りで声が震え出す。しかし、そんな変身少女の思いとは裏腹に突き出されたお尻の上に生えた犬尻尾は、まるで嬉しそうに左右に忙しく振られていた。

何かを期待するように尻尾を動かすシオンの姿に興奮したのか、触手たちは生意気に吠え続ける駄犬を躡けるかのようにさらに大胆に触手を蠢かす。

クチュツ、グチヨツ、ジュルルツ!

「んっ、ひゃっ、ひあああつ！ ど、どこ触って……はんっ、ううんんん〜ッツ!!」

勢いの増した触手たちの責めは、変身少女の性感帯へと集中した。屈辱的な体勢で突き上げられた可愛らしいお尻へと群がった肉紐は、彼女の柔らかなヒップに粘液を塗りたくりながら尻の谷間へと滑り込む。

恥ずかしい箇所をなぞりながら触手は、下へ、下へと向かっていく。そして、終には股布に守られた股間をペロリと擦り上げた。

「や、やめな……さい……ッ！　そこは貴方たち……あつ、くう……なんかが……さ、触つていい場所じゃ……あ……」

必死に抵抗をしようとしても股布越しに秘部を舐められると身体から力が抜け、普段は凜と響くような声が弱々しく震えてしまう。

——な、なに……これ……？　は、恥ずかしいところ……触手が撫でると……お腹の奥で……ムズムズして……や、嫌ッ……な、なんなのこれ……ッ！

いくら劣勢を強いられるとはいえ、それでも本来の彼女であれば魔獣程度に遅れを取るなどない。だが、今は違う。身体に生えた犬耳や犬尻尾といった器官に加えて身体を蝕んでいく未知の快感にひどく動揺し、冷静さを欠いてしまっていた。

「ひゃっ……あつ、ううう……ン……お臍の下……どんだん熱くなつて……きてるう……身体もピリピリ痺れて……へ、変な声……で、出ちやう……ッ！」

触手に身体を觸られる度に背筋に電流が^{ほとほし}進り、下腹部に熱い疼きの^{おり}澱が沈み込んでいく。

ビクビクと拘束された四肢が震え、下腹部に残り続けるこそばゆい感触に思わず腰が跳ねてしまう。

面白いほどに身体を震わせるシオンの様子を楽しむように、触手が股布に覆われた秘裂を何度も上下に撫で上げる。その度に身体に迸る痺れはだんだんに強くなっていく。

「お腹の奥……どんだん熱くなってえ……む、胸もムズムズして……ひゃつ、な、なんで……私の乳首……こ、こんな……ッ！」

身体が疼くほどにお腹の奥から発せられる熱も増し、全身にまで疼きが浸透したと思えば胸の先まで熱を持ち始める。

ムズムズとした搔痒感に何事かと思ひ顔を向ければ、両腕に挟まれた胸の先端がフィットスーツを押し上げ、恥ずかしい陰影を浮かべていた。

自分自身でも信じられないような恥ずかしい身体の変化に、羞恥心に顔を真っ赤に染めるシオン。だが、彼女を苛む羞恥はこれだけでは終わらない。

ヌプッ、ヌチャッ、グチュ……ッ！

何度目かの愛撫の途端、シオンの反応が変わった。大事なところから感じる今までと違った感触と触手の粘液とは違う水音に、変身少女は慌てて顔を上げた。

——そ、そんな……、う、嘘つ、嘘よ……ッ！

全身を駆け抜ける刺激に布越しに責められ続けた秘肉は綻び、まるで熟した果実のよう

に甘露が溢れると変身衣装の股布に淫らな染みを作ってしまう。

「ち、違っ……、わ、私は感じてなんか……ああ……はひっ、ひいい……っ！」

オシッコとは違う恥ずかしい箇所からの分泌液。オナニーすらろくにすることがなく性に疎いシオンであつたが、いやらしい水の音を立てる液体の正体がなんなのかぐらいいは知っていた。

そして、それを知っていたが故に彼女は強く狼狽した。自身の身体の反応を認めるわけにはいかず、必死に否定の言葉^{まく}を捲し立てる。

ヌルッ、グチュッ、ニユルルッ！

そんな彼女に現実を叩き付けるかのように触手が激しく蠢けば、耳を覆いたくなるようないやらしい水音が周囲に響き渡り、ビクッ、ビクンッとシオンは腰が跳ねてしまう。

「はうンッ！ んっ、んああああ……ッ！ な、なんで……こ、こんなに……ふううううんんウウウ……ッ!!」

犬尻尾という未知の性感帯への愛撫にすっかりトロトロに蕩けさせられてしまった犬耳少女の秘肉、そんな彼女の蜜壺を刺激する触手の愛撫は大人びた外見とは裏腹に性に対して疎い彼女にとつてどのように耐えていいかわからない。

何度も全身を貫く肉悦に身体がビクビクと小刻みに痙攣し、閉ざしていた口からも耐えきれずに甘い声を漏らしてしまう。

「はひいッ！　む、胸まで……ひゃっ！　あつ、ああ……ひい……ひい……そ、そこは……はくうんんんううう——ッ!!」

気丈な少女の嬌声をもつと楽しんで胸に巻き付き、柔らかな乳肌の弾力を味わっていた肉紐の先端が、豊満な乳房の頂点でピンッと勃ち上がりフィットスーツを押し上げるシオンの乳首へと狙いを定める。

「はひいひいひいひいひい——ッッ!!」

クリクリと触手が勃起乳首を捏ねくり回すと、強烈な快感がシオンの身体を貫いた。あまりの快感に身体を仰け反らせながら、変身少女は声を抑えることすらできず悲鳴に似た嬌声を上げてしまう。

コリコリと尖り勃つた乳首が痛くなるぐらい罅られる。

紫色の髪を振り乱し掲げたお尻を左右に振りながら、激感に耐えようとグッと目を瞑る。しかし、彼女のそんな抵抗も虚しく触手の責めはエスカレートしていく。

「い、いい加減にしな……ひゃああああ……ッ！　な、なにっ!?　はうっ、んんっ、んああああ……ッ！　ひいっ、はふううううううンンウウウ——ッ!!」

触手たちが殺到したのは、尻尾と同時に彼女の身体に生えたもう一つの器官。紫色の頭の上で刺激を受ける度に、ビクビクと震えていた犬耳だった。

群がる触手が犬耳を揉みくちやにして、グチュグチュと耳穴を穿る。一際大きな粘着音

が聞こえたと思った瞬間、シオンの意識が弾け飛ぶ。

「はひいつ、ひいいい……っ、あ、ああ……、んああああアア——ッ！」

今までとは比べものにならないほどの快感が津波となつて彼女の理性を押し流し、言葉すらまともに喋ることができない。

——な、なにこれ……、あ、頭の中……直接、掻き混ぜられ……はひいいい……ッ！
ヌチャヌチャと激しくいやらしい触手の耳責めは、どの性感帯よりも激しい快感をシオンに与えた。直接頭の中を掻き混ぜられてしまうような魔悦に、犬耳少女は為す術もなく魔獣たちの前に屈服する。

駄目だ、負けちゃいけない。

いくら強く思つても犬耳を責められればそんな抵抗心は簡単に吹き飛んでしまう。いやらしい粘着音が頭の中で反響し、ともに頭が働かない。

「あんっ、んんっ……み、耳……ッ！ 耳は、やつ、やめ……ひやうううウウウ……ッ！」
強烈すぎる快感が身体全体へと浸透し、彼女の官能を燃え上がらせる。ビクンッ、ビクンッと身体を激しく震わせて、快感に戦慄く変身少女。

「はうっ、む、胸……乳首いい……、んっ、んあつ！ 尻尾も引つ張つちゃ……ひやうんンンッ！ はひっ、そこ擦らな……あひいいいいイイ……ッ！」

執拗な耳責めに同調して、全身に絡み付く触手たちの愛撫も激しさを増した。ピンピン

に勃起した乳首が何度も弾かれ、捏ねられる。

乳肌にはきつく触手が巻き付き、まるで牛の母乳でも搾るかのように激しい搾乳責めがDカップのバストを襲う。

シコシコと尻の谷間に潜り込んだ触手が上下に動き、びしょびしょに濡れ解れた淫裂を股布越しに扱き上げる。新たな性感帯である犬耳や尻尾も執拗に撫で擦られ、襲いくる激感に限界まで広げられた口から舌を突き出しては喘ぎ乱れる犬耳ヒロイン。

「ま、負けるわけ、には……あ……ッ、あんっ、はううッ！ うっ、ふうう……、ふあっ、あっ、うくううう……ッ!!」

全性感帯を襲う、触手の波状攻撃。

下水路内に響き渡る淫らな粘着音と、恥ずかしい自分の声。それら全てを犬耳になったことによつて鋭敏となった聴覚が余すことなく拾い上げてしまう。しかし、それらを恥じ入っている余裕など彼女には存在しない。

それどころかその敏感な耳を責められたら、何も考えられない。

——な、何か……くる……ッ！ か、身体がおかしく……だ、駄目ッ、耐える……のよ……シオン……負けちゃ……で、でもお腹の奥どんどん熱くなって……あっ、ああ……だ、

駄目ええええエエ……ッ!!

魔悦の洗礼が犬耳少女を襲い、頭の中で何度も快感が破裂する。身体を劈く激感はどう



三章 敗辱の犬耳少女

「覚悟しなさい！」

「チッ！」

完全に敵を捉えた刃が振り下ろされようとした瞬間、小悪魔少女が右手を振るい魔法を発動する。すると、二人の間の空間が歪み、その中から何か動く影が目に入った。

——今更、そんな小細工で……ッ！

また、妖しげな魔法を発動される前に倒す。

どんなことが起こってもこの剣を止めることはない。そう決めていた犬耳ヒロインであったが、空間の歪みから姿を現した人影を見て耳と尻尾をピンッと立たせると、自分の身体にブレーキをかける。

「くっ、ひ、卑怯よ……ッ、人質、なんて……」

二人の間に姿を現したのは、先ほどまでここに居た学生たちと保健医だった。振りかざした剣を男子生徒の首元で止めたシオンは、三人の陰に隠れるように立つプリムラに怒りを向けた。

「あら、ただの人質だと思う？」

「……えっ、あ、あぐッ!? ぐっ、ゲホッ……ゲホッ……ッ！」

敵の言葉と共に、男子生徒の拳がシオンの腹に沈む。重い衝撃に視界が瞬き、変身少女の身体が『く』の字に折れた。肺から空気が抜け、吐き気が込み上げてくる。不意の一撃

に、まだ理解が追いつかない。

「あつ、う……うう……や、嫌ッ！ は、離して……うつ、うあつ……ッ！」

そんな変身少女を畳み掛けるように、男子生徒と保健医が彼女の両腕を掴み、拘束する。まるで罪人を取り押さえるかのように腕を背中に回され、膝を折るようにして座らせると、小悪魔少女に頭を下げるように押さえつけられてしまう。

彼らは小悪魔少女の魔法によって目からは光が失われ、皆一同に虚ろな表情をしていた。「み、皆を操ったのね……ひ、卑怯者……ッ！」

妖しげな魔法に侵され、淫らな熱が身体を蝕んでいようと、魔力と科学の力を融合したヴァイスセイバーの力が普通の人間に負けることなどない。しかし、今、彼女を取り押さええている人たちの尋常ではない力に、目の前の小悪魔少女の仕業であることがわかった。

シオンは押さえつけられ軋む腕の痛みには耐えながら、頭を上げ、卑怯な手を使うプリムラのことを睨み付けた。

「その目こつわぁい。お姉ちゃんも言つてたでしょ、とつておきは最後まで取つておくもんだつて、ふふつ、これが私のとつておき！ あはつ、勝てそうだったのに残念だったねえ〜」

取り押さえられた犬耳ヒロインのおでこに指を当てて、小悪魔少女はまんまと自分の策に嵌はまった獲物を嘲笑う。

「くっ、こ、こんなの……ぐ、うう……くうう……ん」

悔しさにギリギリと奥歯を噛み締め、何とか男子生徒たちの腕を振り解こうと暴れるシオン。しかし、いくら彼女が力を込めてもプリムラに操られた生徒や保健医の手を振り解くことはできなかった。

「お姉ちゃんの負けだつてのに、まだ暴れるなんて、凶暴なワンちゃんだなあ。これはうちに連れていく前にちよつと躰けとく必要があるかなあ？」

まさに、鎖に繋がれた犬。

身動きの取れないシオンを見下し、優越感に浸りながらプリムラはわざとらしく言葉を続ける。

「つてなわけで、アンタたちお願いねえ。お姉ちゃんを立派な牝犬に躰けちゃつてえ」
小悪魔少女がそう命令を下すと、シオンの両脇で彼女を拘束する男子生徒と保健医がこくりと頷く。そして、余つていたもう一人の男子生徒が囚われのヒロインの前に立った。

「な、何を、する気……？ い、嫌……ッ、や、やめなさいッ！」

目の前に立った男子生徒を怪訝そう見つめると、唐突にその生徒はシオンの頭を掴み、自分の股間に彼女の顔を近づける。

「ふふ、まずはこれから何度もお世話になるものの臭いを覚えようねえ」

「——なっ?! あっ、あぐう……うっ、ふうう……んッ！」

プリムラのあまりにもふざけたもの言いに、サーッと頭から血が引いていく。いったいその行為に、何の意味があるのかわからない。ただ、これ以上彼女の思い通りにされるのはまずいと、頭の中で警報が鳴り響いた。

逃げ出そうと暴れるシオンだったが、小悪魔少女に操られた彼らの力にはやはり逆らえない。抵抗も虚しく、男子生徒の股間に顔が触れてしまう。

——うっ、くうう……ン、んあつ、あくう……す、凄い臭……い……。

プリムラの前で変身したことによって再び生えてしまった犬耳や尻尾を見てもわかるように、シオンの身体を蝕む魔法の力はさらに効力を増していた。

教室や保健室のベッドの時以上に嗅覚は敏感になってしまい、男子生徒のズボン越しにツーンと漂ってくる異性の臭いを嗅ぎ取ってしまう。

——お、男の人の……に、臭い……あふっ、んん……ンッ！

咽せ返るほどの強烈な男の性臭に最初は激しく抵抗をしていたシオンであつたが、その臭気が鼻腔を擦るにつれ、頭がクラクラして考えがまとまらなくなっていく。

身体からは力が抜け、忘れようとしていた妖しい疼きが再び勢いよく込み上げてくると、ふらふらと花の香りに誘われる蝶のように、男の股間へと自ら顔を近づけてしまう。

「あつ、んふう……ンっ、か、嗅いじゃ……駄目ッ、またおかしく……で、でもお……」

嗅げば嗅ぐほど身体は火照り、キュンッとお腹の奥で子宮が潤んでしまう。強烈な性臭

に、発情した犬の性を呼び起こされてしまう。

本能が訴えかけてくる異性の体臭への欲求に逆らうことができない。

気が付けば、クンクンと鼻を鳴らして異性の香りを嗅ぎ、すっかりその臭いの虜になってしまっている自分が居た。

あれほど拒んでいたにもかかわらず抵抗をやめ、発情した牝犬ヒロインはすっかり大人しくなってしまう。まだ、男性経験もないというのに蕩けきった表情で物欲しげに男の間を凝視し、半開きになった口からだらしなく涎を垂らすその仕草はまるでお預けを食らった飼い犬のようだ。

「あははっ、もうそんなエッチな顔になっちゃって、お姉ちゃんってばやっぱり牝犬の才能があるよ！」

「……ッ!? ち、違ッ……こ、これは……あつ、ふうう……ン」

プリムラの言葉に、ハッと我に返ったシオンは慌てて否定の言葉を口にする。

しかし、すぐさま男子生徒の股間に顔を押し当てられて臭いを嗅がされれば、またしても瞳を潤ませ甘い声を上げてしまうのだった。

そんな発情ヒロインの姿を見て、再び小悪魔少女が指を鳴らす。

すると、シオンを取り囲む彼らの瞳に妖しい光が宿り、変身少女を左右で押さえつける学生と保健医が口を開いた。

「おいおい、そんなに楽しそうに尻尾振っちゃまって、何が違うんだよ」「そうね、涎も止まらないみたいだし。貴女自分がどんなエッチな顔してるかわかつてる？」

操り人形のように自我がないと思われた人たちから浴びせられた罵声に、犬耳をピクツと震わせて驚く。しかし、次の瞬間、すぐに凄まじい羞恥心が彼女を襲う。

「あっ……ち、違……ッ！」

「違わねえよ、ほらさつきからずっと尻尾を左右に振りっぱなしじゃねえか、嬉しくないってんなら、その尻尾止めてみるよ！」

男子生徒の言葉を否定しようとしたが、すぐに畳み掛けられるように罵声を浴びせられる。男が言う通り、お尻の上に生えた尻尾は先ほどから左右に揺れてしまっていた。

——止まって、止まってよお……ッ！

自分の身体に生えてしまった犬パーツに意識を向け、必死に動きを止めようとするが言うことを聞いてはくれない。それどころか、目の前から漂ってくる臭いを嗅げば嗅ぐほどに、本当の犬のように尻尾を振り続けてしまう。

「ほら、見てみなさい。とつてもエッチな顔よ……」

「……えっ？ あっ、う、嘘……あ、ああっ……」

もう片方の手を押さえていた保健医が白衣のポケットの中からコンパクトを取り出すと、必死に尻尾に意識を向けようとするシオンの目の前で開いて見せた。

すると、コンパクトの鏡に目尻の下がった瞳を涙で潤ませ半開きになった口の端から涎を垂らしている情けなく緩んだ少女の顔が映し出される。

それが自分の顔だと、シオンは一瞬気付けなかった。

それほどまでに鏡に映った顔は情けなく淫らなもので、普段悪魔と対峙している戦士のものとは思えない。

無意識のうちに緩んでしまった表情や反応してしまつた犬尻尾。しかし、何よりも恐ろしいのは、そんな身体の状況を指摘されながら酷い言葉を浴びせられる度に淫らな反応を示してしまう身体だつた。

生徒や保健医の言葉を聞く度に、ゾクゾクとマゾヒスティックな快感が背筋を走り抜ける。下腹部が熱く疼くと、恥ずかしい蜜がフィットスーツの下でヒクヒクと震える秘唇から滴り落ちてしまう。

——な、なんで……わ、私……こ、こんな……あ……。

臭いや言葉にあさましく反応し、その度に込み上げてくる妖しい快感。

今まで知らなかつた反応を示してしまう自分の身体に戸惑う犬耳ヒロイン。そんな彼女を心底樂しげに小悪魔少女は眺め、自身もまた言葉責めに参加していく。

「いやあ、お姉ちゃんにはマゾっ気があると思つたけど予想以上だねえ。本当に可愛いい、そろそろご褒美あげちゃおうかなあ。それじゃあ皆、お願いねえ」

「ははっ、コイツ、今、耳をピクピク動かしやがった。もう期待してんのかよ、変態だな」
プリムラの言葉に、シオンの顔に股間を押し付けていた男が続く。

男の言葉通り、シオンの犬耳はプリムラの言葉に無意識に、ピクッと反応してしまっていた。またしてもあさましい身体の反応を指摘され、あまりの恥ずかしさに顔を真っ赤にさせながら俯く犬耳ヒロイン。

しかし、発情しきった身体はその羞恥すらも快感へと変換し、より淫らに官能を燃え上がらせるのだった。

「つたくう、俺のズボン、コイツの涎でびしょびしょだよ。どうしてくれんだよこの変態マゾ犬！」

「はう……うっ、んんんッ！」

容赦なく浴びせられる罵声。

その度に犬耳と尻尾がピクピクと反応し、堪らない焦燥感が秘部を戦慄かせる。モジモジと太腿を擦り合わせ、甘い声が口から漏れてしまう。

そんな変態マゾヒロインの期待に応えるかのように、彼女の犬耳に、ジジジッとズボンのジッパーを下ろす音が飛び込んでくる。

「ほら、コイツが欲しかったんだろ、マゾ犬！」

音に釣られ顔を上げれば、そこには雄々しくそそり立つ肉の棒がズボンのジッパーから

顔を出していた。

「あつ……い、嫌……ッ！」

赤黒いその身に血管を浮かばせ、ドクドクと不気味に脈打つ肉凶器。あんな物が同じ人間に生えているなど信じられず、そのあまりにもおぞましい姿に初めて男性器を目にしたシオンはすっかり怖気づいてしまっていた。

性知識も乏しい少女はそのおぞましい肉棒でこれから何をされるかわからず、イヤイヤと紫色の髪を振り乱しながら、駄々っ子のように頭を左右に振る。

「なに今更嫌がつてんだよ、ほらお前の大好きなチンポだぞ！」

暴れる頭を左右の二人に押さえられ、男の逸物を直視せざるを得なくなったシオンに向かって、目の前に立つ男は一際大きく膨らんだ龟头部分をグイッと高く形のいい犬耳ヒロインの鼻に押し当てた。

「あぐっ、い、痛い……あつ、あん、ふうう……う……ッ！」

鼻に押し当てられた肉棒から漂う臭いは、ズボン越しに感じた臭いとは段違いであった。独特の刺激臭はまるで麻薬のように依存性が高く、あつという間に発情ヒロインの理性をドロドロに溶かしてしまう。

「おっ、もう大人しくなりやがった。へへっ、やっぱマゾの変態犬だ、ほらほらっ！」
しおらしくなった牝犬ヒロインに気をよくした男子生徒は、彼女の鼻に臭いを染み込ませ

せるように亀頭を何度も擦り付ける。

——あ、ああ……す、凄い臭い……こ、こんな我慢なんて……え……。

男根に染みついたすえた性臭が鼻を掠めると、頭がトロトロに蕩けてしまう。何もかもがどうでもよくなるほど気持ちよくなって、おねだりするように鼻をクンクン鳴らしながら臭いを求めてしまう。

臭いを嗅げば嗅ぐほどに身体の疼きは激しくなり、マゾ犬ヒロインは上の口だけではなく下の口からも涎を垂らし、ピクピクと身体を震わせ悩乱する。

「ふふっ、オチンポの臭いだけでこんなになっちゃって……、そろそろそのお口で味わってみたくなったんじゃない？」

「こ、これを……口で……？」

すっかりだらしない表情を浮かべるシオンの犬耳に、保健医が囁きかける。

わかりやすいぐらいに耳と尻尾をピクッと震わせると、マゾ犬ヒロインは眼前のペニスを見つめた。

「そう、お口で……。ほら、舌を出してまずは舐めてみましょう」

「あ、ああ……」

勃起した肉棒の臭いにあてられ、すっかり蕩けきった思考の中、保健医の艶かしい声が犬耳を通し、シオンの頭に吹き込まれていく。

彼女の言葉に従って、ゆっくりと口を開いてしまう牝犬ヒロイン。

「そうそう、まずはそうね、アイスでも食べるようにゆっくりと竿を舐めてみましょうか」
だらしなく開かれた口から唾液に濡れた舌を伸ばし、保健医の誘導に従ってゆっくりと
振り返る肉棒に舌を触れさせる。すると、勃起根がビクンッと跳ねた。それに驚いたシオ
ンが顔を離そうとするが、それは保健医に頭を押さえられて阻止されてしまう。

「大丈夫、怖がらないで。ほらゆっくりと先端に向かって舐めてみなさい」
言われるがままに、脈打つ男根に舌を這わせていく。

今まで味わったことのないすっぱさと苦味の混ざった変な味に顔を顰めた犬耳ヒロイン
だったが、それも最初だけだ。舌を痺れされるような強烈な味の正体を探ろうと味わって
いるうちに嫌悪感が薄れていく。

勃起根の裏筋を先端に向けてゆっくりと舐め上げていくにつれ、味は濃くなっていく。
先端の笠の溝を舐めるとまたしても肉棒が大きく震えたが、今度は舌を離さなかった。そ
して、そのまま膨らんだ亀頭の先端までをペロリと舐め上げる。

「さあ、そのまま何度も舐めてあげましょう、優しく大事にね……」

「ひゃ、ひゃい……」

たった一舐めしただけだというのに強烈な男の臭いと味に、すっかりマゾヒロインはペ
ニスの虜になっていた。

——熱くて火傷しちゃいそう……それにビクビクして……舌を押し返してくる……んっ、鼻にまで濃い味が上つてきて……あんっ、んっ、す、すごい……ッ！

肉棒を味わえば味わうほど子宮がキュンキュンと疼き、恥ずかしい蜜が止め処なく溢れてきてしまう。

ペロッ、ペロペロッ！

舐めれば舐めるほど満足感と快美感が心を満たしていく。

——口の中にいっぱいおちんちんの味が広がって……あつ、ああ……お口の中おちんちんでいっぱいになってく……ッ！

もつと味わいたい。もつと気持ちよくなりたいたいという思いに駆られ、保健医に言われた通りに肉棒への奉仕を続けていくシオン。だが、その心地よい時間もいつまでも続きはしなかった。

「いつまでちんたら舐めてんだよ、とつとと唾えやがれっ！」

「んっ、んッ！ふううんっ、んっ、んぐううううッ!!」

シオンの奉仕に我慢しきれなくなつた男子生徒が唐突にシオンの頭を掴み、ギンギンに腫れ上がった勃起根を口の中へと捻^ねじ込んだのだ。

極太の男根を一気に喉元まで押し込められ、何が起こつたのかもわからず目を白黒させる犬耳ヒロイン。そして、次の瞬間、鼻にまで上がってきた強烈な臭いと味に吐き気が込

み上げてくる。

「むぐっ……うっ、うううンッ！ んっ、んんんッ！」

気持ち悪い。

込み上げてきた吐き気が、蕩けきっていた彼女の思考を無理矢理現実へと引き戻す。

——い、息ができ……ないっ……。

勃起根に口を塞がれた状態で、呼吸も儘ままならぬ変身少女はあまりの息苦しさに生命の危機を覚える。慌てて酸素を求めて肉棒をどかそうと舌を動かした。

「おっ、ちよつとは騾の効果が出てきたんじゃねえの？ そうそう、そうやってしつかり舐めてくれよ、なっ！」

「……あぐうッ!!」

小さな口に押し込められた肉棒を押し返そうと動かした舌だったが、そんな彼女の行動が逆に男子生徒を悦ばせてしまう。男はさらに快楽を貪ろうとシオンの頭を掴み激しく前後に腰を動かし始めた。

——の、喉に当たって……んぐうう……ッ、おちんちんが喉にゴリゴリって……ンッ、あぐっ、うぐううう……ッ！

勃起根の先端が喉奥を穿ち、喉粘膜にその身を擦り付けてくる。その度に激しい吐き気に襲われ、気丈な変身少女の瞳に涙が浮かぶ。

「うっ、むう……んぐうう……ッ、ぐちゅっ、じゅるっ、うっ、ううううンッ！」

男子生徒の我侷わがままな動きに文句の一つも言つてやりたかつたが、極太の肉棒で口を塞がれた状態ではくぐもつた呻きを漏らすのがやつとだ。

せめてもの抵抗に男の顔を睨み付けようとするが、頭を押しえられた状態では上目遣いで男の物を奉仕しているように見えてしまう。フェティッシュな格好の美少女に男根を啜えられるだけでなく涙で濡れた瞳で見つめられれば、嗜虐心が擗られ、男子生徒は腰の動きをさらに激しくさせた。

「もつとエツちな音立ててくれよ、マゾ犬ちゃん」

強制イマラチオによる喉を抉えぐられるような苦しみから、すっかり理性を取り戻したシオンはあまりにも身勝手な男の言葉に腹を立てていた。しかし、少女の反抗心とは裏腹に喉奥を突かれると苦しさのあまり唾液が溢れてしまう。

グチュッ、ジュルッ、グチュチュッ！

激しく動く肉棒に、口の中に溜まつた唾液が絡まり、恥ずかしい水の音が鳴り響く。

——な、なんで……こ、こんなの……い、嫌ッ……！

自分の口から響くいやらしい音から目を背けるように、ギユッと目を瞑る口辱少女。だが、いくら目を瞑ろうと彼女はこの辛い現実から逃れることはできない。

「あら、駄目よサボっちゃ。ほら、こうやって舐めて彼を楽しませてあげないと……」

「~~~~ッ!?」

ペチャッ!

敏感な犬耳を擦るような保健医の言葉と湿った感触に、ビクンッと耳が跳ね上がる。

——ひゃっ! み、耳……ッ! そ、そこは……び、敏感なの……んっ、んくう……な、舐めないでえ……ッ!

シオンのことを取り押さえる保健医は彼女の犬耳へと舌を伸ばし、グチュグチュと耳穴を舐め始めた。頭の中に直接水音が鳴り響き、思考を滅茶苦茶に掻き乱すような強烈な快感に眩暈めまいを起こしてしまう。

——い、嫌ッ……そ、それおかし……く、おかしくなっちゃ……ンあつ、や、やめ……んひっ、はっ、ひい……ひゃっ、ひゃああああアア……ッ!

頭を押さえられ勃起根で口を塞がれた状態の今の彼女には、保健医の舌から逃れる術はない。動けない変身少女の犬耳を柔らかな舌が形を確かめるように舐めなぞり、薄い皮を擦りながら、ギョポギョポとわざと音を立てるように耳穴に舌を出し入れする。

——あ、頭の中に耳を舐める音が響いて……あつ、あんっ、こ、これ……ひいひい……っ、頭の中……め、滅茶苦茶になっちゃう……ッ!

保健医の舌が耳穴を穿る度に、犬耳ヒロインの身体がビクビクと震え上がった。狂おしいまでの耳責めの快感に身体の痙攣は止まらず、頭の中で何度も白い火花が散っていく。

「んちゅつ、ちゅつ、くちゅつ、ほらほら、しつかり奉仕しないともつと舐めちゃうわよ」
「ふうんつ……んぐうんツ……じゅるつ、ぐちゅ……ちゅつ、ちゅばつ……」

気が狂いそうな悦楽に苛まれた牝犬の身体は、保健医の言葉のままに口腔内を犯す勃起根に舌を這わせてしまう。自分の口と耳から聞こえてくる卑猥な音色に悩まされながらも、口辱少女の身体は再びマゾヒスティック快感に蝕まれようとしていた。

耳を舐められながら独特の味がする肉棒に舌を這わせれば、それだけで子宮が潤み、フイットスーツの股間部分に楕円形の染みが浮かび上がる。ただでさえ身体にびっちり張り付くインナースーツがさらに密着し、秘丘の形までくつきりと浮かび上がらせてしまう。秘穴から漏れる自らの愛液の感触に、マゾ犬ヒロインは羞恥に身悶えた。

「へへっ、チンポを口の中に突っ込まれて感じてやがるぜ！ ほら、乳首ビンビンに硬くしてやがる」

「むっ……むぐうう……ッ！」

口や耳、初心な彼女には想像もつかなかった箇所を責められ、ただ押し寄せ来る快感の荒波に翻弄されるシオン。

そんな彼女をさらに崖っぷちへと追い立てるように、彼女の身体を取り押さえていたもう一人の男子生徒が激しい口唇によってたゆんだゆんと揺れる犬耳ヒロインの乳房へと手を伸ばす。

ギユウツとインナーズーツに包まれたDカップの美乳を鷺掴みにすると、指の間から柔らかい乳肌がむにゅりと溢れ出る。力を込めれば込めるほど柔らかく形を変えたかと思えば、しっかりと手を押し返す張りもあるバスタの感触を男子生徒は堪能し続けた。

——そ、そんな……む、胸もだなんて……あひつ、ひつ、くひいいい……ンツ！

男の手がグイグイと乱暴にシオンの乳房を揉みしだくと、フィットズーツを押し上げる硬く尖った乳頭をギユツと摘み、思いつき引き引つ張り上げた。

「ふぐツ、んっ、んんんンンンッッ!!」

瞬間、胸の先から痛烈な快感が全身に流れ込む。

身体中を暴れ回る激感に潤んだ瞳を見開いて、男根を咥えた口で絶叫する犬耳ヒロイン。「鳴いてる暇があつたらちゃんと言と俺のを舐めるよ!」「あらあら、もう舌が止まつてるじゃないいけない娘ね」「おいっ、今度は俺と代わってくれよ」

強烈な刺激に、ビクビクと身体の震えが止まらない。そんな状態にもかかわらず、彼女を囲む者たちの責めはやむことはない。

男は乱暴に腰を打ちつけ、喉奥まで余すことなく小さな口内に己の欲望をぶつける。

もう一人の学生は次に回ってくる自分の番を楽しみに待ちながらコリコリと勃起した乳頭を指で摘み弄くり倒す。

保健医はピクピクと震える犬耳に舌を出し入れしては、わざと音を大きく立てながら舐

めしやぶり続けた。

——はぎいっ……イッ、ひいい……お、おかしくな……るう……頭の中ぐちゃぐちゃになつて……おかしく、なっひゃ……くうううう……ッ!!

鬨られ続けた口はヒリヒリと痺れ、とうに感覚はない。抓つかられ弄もくり続けられた乳首やじゅぶじゅぶと舌で穿られた犬耳も同じだ。だというのにマゾヒスティックな悦びだけはしっかりと感じてしまう。

ジュポッ、グチュッ、ジュポボッ!

痺れて、すっかり力が抜けてしまった口は、男によってオナホルルのように犯された。乱暴に出し入れされる男根にはシオンの唾液が絡み付き、口の端からは唾液とカウパーの混合液が溢れ、敗辱戦士の顔をより淫猥に飾っていく。

——な、なに……ッ!!

玩具のように扱われる犬耳ヒロインの口の中で、勃起根がドクンッ、ドクンッと大きく跳ね上がった。今までとは明らかに違う男性器の動きに、初心な少女はただ戸惑うことしかできない。

だが、混乱する口辱少女などお構いなしに口を犯す男のペニス大きく膨れ上がり、その時を迎えようとしていた。

「おらっ、射精だすぞっ! しっかりと飲み込めよッ!」



はっ、このザーメン触手で今からお姉ちゃんを孕ませてあげるねえ〜」

「こ、こんなの……お、犯されるなんて……い、嫌ッ……嫌よ……はんっ、ふあっ、な、なんで……はひっ、ひいひい……うう……ッ！」

シオンの言葉を遮るように、精液触手が彼女の身体を再び嬲り始める。

熱くて濃いザーメンに包まれて散々欲情を煽られた身体への刺激は、シオンの想像を超えて堪らなく心地よいものだった。全身に走る快感にベッドに縛り付けられた身体が、ビクンッと何度も跳ね上がってしまう。

「や、やめな……さい……ッ、き、気持ち……悪い……はうっ、あっ、あふうう……ッ！」

ムズムズと疼く秘唇に弱々しく身体を震わせながらも、ヴァイスセイバーとしてのプライド、最愛の母との約束。そして、悪魔たちへの恨みが屈してしまいうるシオンを必死に支え、刺激を拒む言葉を口にす。

しかし、その言葉は彼女の身体同様に震え、甘く上擦ってしまった。

「どうしたのお〜お姉ちゃん、気持ち悪いんじゃないの？ さつきからエッチな声我慢できなくなってるよお〜」

「なっ、ち、違っ……ううん……ッ！」

プリムラの言葉を否定するシオンであったが、その声にも甘い喘ぎが混ざってしまう。普段の凛とした声色も忘れ、媚びるような甘い声を漏らしながらその顔を雄汁でベトベト

に濡らした状態では、いくら彼女が否定しても説得力など微塵もない。

「ふふっ、ウソは駄目だよ、お姉ちゃん。悪い悪いウソつきお姉ちゃんにはお仕置きだよ、あはははははッ！」

そんな発情牝犬を弄ぶように胸を嬲る精液触手は谷間へと潜り込み、たわわな果実に挟まれながら、ピチピチとのたうち回る。

「はふう……んっ、くうう……ッ！」

「クスクス、あんなに強がってた癖におっぱい弄られただけですぐこれだもんねえ。ほら、アナタたちもっとお姉ちゃんのおっぱいを苛めちゃいなさいっ！」

美乳に挟まれ乱暴に暴れ回る精液触手に、思わず声を漏らしながら身悶えるシオン。そんな彼女の姿に気をよくしながら、プリムラは淫猥な触手に向かって命令を下す。

「あぐう……んっ、あつ、ああ……む、胸え……い、痛い……あくうう……ん！」

乳房の根元から巻き付いた精液触手が、ギユウツ、ギユウツとまるで牛の乳でも搾るかのようにシオンの乳房を弄り出す。触手に力が加わる度に、魔獣たちのザーメンを吸って変色したフィットスーツに淫猥な皺が刻まれ、柔らかな肉鞠が括れる。

力強い触手の搾乳愛撫に顔を顰めるシオンであったが、彼女が感じたのは痛みだけではない。乳腺まで刺激する触手の動きは発情した身体に心地いい乳悦を伝えてくる。搾られ、括れる胸の先端では、快美感に勃起乳首がプルプルと震えていた。

「それそれえーッ！ そのえつろおーい乳首も食べちゃえっ！」

「はふっ!? ひやつ、はっ、ふうううううう……ンッ!!」

プリムラの魔法によって作られた精液触手は、その形を変えるのも自由自在だ。

シオンの胸にとぐろを巻く触手の先端がぱっくりと二つに割れ、プルプルと震える乳房の先端で変身衣装を押し上げる突起をパクッと飲み込んだ。そして、そのままチュウチュウと敏感突起を吸い上げる。

胸の先端から全身に走り抜ける激感に、シオンの身体が何度もビクンッと大きく跳ねる。ガチャガチャと拘束具を鳴らしては、変身少女は強烈な刺激に喘ぎ乱れてしまう。

それほどまでに勃起した乳首への責めは強力だった。

精液触手の中では魔獣たちの雄汁が絶えず渦巻いていた。ザーメンの流れが勃起した乳頭に絶えず刺激を与えてくる。まるで指で摘まれ、擦られ続けているような刺激。

それだけでも十分強力なのに、煮えたぎった精液は未だ健在で、犬耳ヒロインの官能をジワジワと炙り続けてくる。

チュウウウウウウ——ッ！

さらに魔法で操られたザーメンは音を立てながらシオンの乳首を吸い上げてくるのだ。

乳首への研磨責めと吸引はどんどん強力になり、大きく口を広げた触手はスーツに浮かび上がる卑猥な乳輪までも飲み込んでしまっていた。

「はふっ、ふう……ううっ、ンあ……ち、乳首そんなに吸っちゃ……はひっ、ひい、いい……くひいいいい……ンッ！」

発情した牝犬の身体にはあまりある胸への肉悦にシオンは頭を仰げ反らせ、拘束された身体をガクガクと揺らすと、精液風呂の中に大量の愛蜜を撒き散らしながら達してしまう。

「胸だけでイッちゃうなんて、流石私が見込んだだけはあるよ、牝犬お姉ちゃん」

「ち、違う……わ、私は……感じて、なんか……あっ、んくうう……ッ」

ケラケラと笑うプリムラに、肩で息をするシオンが声を上げる。しかし、その声はひどく弱々しい。それでも変身少女はまだ屈するわけにはいかなかった。ここで負けてしまえばもう二度と戦えなくなってしまう。そう彼女は本能的に理解していたのだ。

だからこそ、どんなにみつともない姿を晒しても小悪魔少女の前で敗北を認めるわけにはいかなかった。

だが、そんな犬耳ヒロインの態度は陵辱者の嗜虐心をいつそう駆り立てる。

「まったく、さつきからウソばかり！ そんな悪い口はお姉ちゃんのエッチなお汁と魔獣のザーメンのミックスジュースで塞いじゃうからねえ〜！」

「——なっ!! うぐうんっ……んっ、ふうううううんッ！」

シオンが声を上げるよりも早く、変身少女の股間辺りから新たな精液触手が水面に顔を出し、彼女の顔まで一気に伸びると、開いた口の中へと押し入ってくる。

慌てて口を閉じようとする犬耳ヒロインだったが、もともと液体である触手は僅かな隙間から簡単に口内へと侵入を果たしてしまう。

口の中に潜り込んだ汚液は再びプリムラの魔法で触手へと戻されていく。ブヨブヨとしたゴム質の触手に、シオンの小さな口はめいっばい押し広げられてしまうのだった。

醜悪な触手を噛み切ろうと、歯を立てる犬耳ヒロイン。しかし、ブヨブヨとした精液触手には文字通り歯が立たなかった。それどころか、力を込めれば触手を形作る汚液が漏れ出し、彼女の口を汚辱していく。

「どう、お姉ちゃんのエッチなお汁の味、美味しい？」

そして、それは今まで身体を齧っていた精液触手とは違う。

プリムラの言う通りその触手を構成する白濁液の中には、先ほど絶頂した際にシオン自身も漏らしてしまった愛液が混ざっていた。

濃厚な魔獣の精液だけでなく、口腔内に広がる甘酸っぱい発情した牝の味。自分の恥液まで飲まされるという屈辱的な仕打ちに、イヤイヤと首を横に振って触手の進入を拒む犬耳ヒロイン。しかし、精液触手の侵攻は止まらない。モゾモゾとシオンの小さな口の中で粘液触手は暴れ回る。

——す、凄い……こ、これ私のも混ざって……はふっ、んっ、す、凄くエッチな味……

あ、頭の中……ぐちゃぐちゃになって……くふうう……んっ！

口腔内で我が物顔に暴れ回る汚液触手は口内で何本にも細かく枝分かれし、シオンの口を余すところなく犯し始めた。

「ふぐうう……んっ、んん、んくう……ぐうう……ううっ！」

枝分かれした触手たちは菌莖や粘膜を撫で上げ、逃げようとした舌にも絡み付く。捕まえた変身少女の舌を激しく扱き、雄汁の味を擦り込んでいく。

口腔内を満たす精液は、次から次へと押し込まれるように喉へと向かう。熱いザーメンが胃に流れ込むと、カアとお腹が熱くなり、キュンッと子宮が疼き出す。

魔獣の精液と自身の恥液を無理矢理味わされ、犬耳ヒロインは涙を流しながら悶絶した。ヴァイスセイバーのプライドを踏み躪るあまりにもむごい仕打ち。しかし、そんな行為にマゾ犬ヒロインの身体は悦び、新たな蜜を股間から滴らせてしまう。

新たに溢れた蜜はすぐにプリムラの魔法によって口辱触手に混ぜられ、彼女の口の中へと運ばれた。濃い精液の味に混ぜられて口の中に広がる自分の蜜の味に、マゾ犬ヒロインは再び愛液を漏らしてしまい、それをまた飲まされる。

生意気な牝犬ヒロインを懲らしめる残酷な責めは彼女が屈服するまでいつまでも続く。

——口の中……精液でいっぱい……に、臭い……すご、いいいい……。

そんなシオンをさらに苦しめるのは、やはり強烈な精液の臭いだ。口を精液触手で塞がれた状態では鼻で息をするしかない。そうなれば犬のように敏感になった嗅覚で、浴槽に

注がれた精液の臭いを嗅いでしまう。強烈な性臭にぐらぐらと視界がぐらついた。

「あれあれ、どうしたのお姉ちゃん。元気がないよ、大好きなザーメンいっぱい飲んで満足しちゃったのかなあ？」

ぶれる視界の中で小悪魔が笑う。全身から力が抜け、手足の感覚がなくなっていく。

なのに、身体を精液触手で觸られる刺激だけは鮮明に感じてしまう。

「ふぐうつ、ううう……ンッ、くふうんんんッ！」

肌を擦られ胸を詰られる度に、精液触手を頬張った口から弱々しい呻きが漏れる。

「もう、お姉ちゃん元気がないなあ、それじゃあつまんないじゃん！」

弱々しく悶える牝犬ヒロインを見下しながらプリムラがそう漏らすと、精液触手が器用に変身衣装の股布に絡み付き、グイッと横にずらしてすつかり蕩けきった秘所を暴く。

曝け出された秘部はまるで餌を求めて水面に顔を出す鯉のように、パクパクとだらしなく口を開き、恥ずかしい蜜を滴らせていた。卑猥な動きを見せる小陰唇の上では苛められて嬉しかったのか、クリトリスが痛々しいまでに勃起してしまっている。

——あつ、ああ……だ、駄目え……。

自分の大事なところが狙われていると知り抵抗しようとしたシオンであったが、酸欠状態の身体に力が入らない。ろくに抵抗もできないままジリジリと迫ってくる触手の気配に怯えるしかなかった。

——く、来るッ!

精液風呂の中、恐怖に怯えヒクヒクと震える秘裂に触手の先端が触れる。

触手の接触到、ビクッと肩が震えた。

精液に浸され今まで散々焦らされ続けてきた秘部。ただでさえ子宮は熱く疼き続けていたのに、もし今ここを貫かれたら自分はいったいどうなってしまうのだろう。淫らな牝犬の身体は期待交じりの恐怖に小刻みに痙攣し出す。

しかし、そんなシオンの予想に反し、精液触手の狙った場所は違った。

——そ、そこは……違……ッ!!

触手の先端が宛がわれたのは期待に震える淫裂ではなく、その下の小さな窄まりだった。まさかの刺激にビクッと震える排泄孔を触手は捉えると——、

「んぐううううううウウウ——ンッ!?!」

力づくで狭い尻穴をこじ開け、ズブリッと貫いた。

それと同時に、今までぐったりしていたシオンが絶叫する。

「どう、お尻の穴を犯されるのは? 元気でたあ〜?」

「あぐう……うつ、んんつ、ふうう……ンッ!」

悶絶するシオンの姿を嘲笑うプリムラ。だが、そんな小悪魔少女に何かを言い返せるような状態ではない。

グチュツ、ヌチャ、グジュジュチュツ!

本来排泄をするためだけの器官に潜り込んでくる異物。今まで物を入れられるなど考えたこともない箇所への責めに、ただただシオンは困惑した。

——な、なんで……こんなところ……はうっ、んっ、んひひひひひひッ!

だが、そんな考えも、ズーンと重く響く衝撃が尻穴を穿てば飛散してしまう。キュツと括約筋を締めて進入を拒んでもどんどん流れ込んで来る精液に、プルプルと尻たぶが痛ましく痙攣する。

「あんっ、うう……くあ、んひひひひひひ……ッ!」

アナルへと身を埋めた精液触手はグネグネと蠢き、腸壁に雄汁を馴染ませていく。その度に尻穴がヒクヒクと震え、注がれていく精液にお腹の中がカアと熱くなっていく。

——あつ、ああ……ぬ、抜いて……苦し……いい……。

尻穴を拡張されながらズブズブと排泄器官の奥へと侵入してくる精液触手に、涙を流しながら身悶える。だが、口も塞がれた状態では彼女の訴えも小悪魔少女には届きはしない。「あれあれえ、涙流しちゃうほど嬉しかったのかなあ? じゃあ、今度はこっちの穴なんてどう?」

「はふっ!! ふうううううんんンウウ……ッ!!」

訴えは届かないどころか、プリムラに都合よく解釈されてしまう。

今までシオンの身体を犯していたものよりずっと細い触手を生み出すと、今度は秘口の上にある尿口へと汚液触手を潜り込ませる。考えも及ばなかった二つの排泄孔を同時に犯され、ビクッ、ビクッと滑らかなお腹が波打った。

「あぐうっ、ンッ!? うう……んんん〜ッ!」

恥ずかしい排泄孔を責められ、込み上がってくる嫌悪感に眉間に皺を寄せていたシオンであったが、唐突にその表情が変わる。

ズブッ、ズブッ、グチョッ、ジュルルッ!

狭い排泄孔に押し込まれた触手が前後に激しく動き、恥ずかしい粘膜壁を乱暴に擦り上げたのだ。無理矢理押し込まれる圧迫感とは違い、触手が出口に向かって戻ると、排泄の快感にも似た刺激がシオンの身体を苛む。

——な、なに……なんでえ……ひやうっ、こ、こんな、うう……んん……っ!

両方の排泄孔を精液触手が往復する度に、身体を襲う妖しい快感は強くなっていく。擬似排泄の快感に身体はブルルッと震え、満足感に力が抜けてしまう。

ズブッ、ズブッ!

力が抜ければその分だけ触手の抽挿は激しくなった。そうなれば当然身体に走る刺激も強くなっていく。ムズムズと込み上げてくる魔悦に犬耳ヒロインの身体は再び限界へと昇り詰めていく。

「あんっ、あつ、ああ……うう……ンっ！ んっ、んんっ、ンああああ……ッ！」
触手が引き、排泄の快感に身体から力が抜けたタイミングで、今度は奥深くまで一気に押し込まれた。そして、触手の先端が口を開き、その身体を構成している雄汁を变身少女の胎内へと注ぎ出す。

「——ッ!!」

腸内と膀胱を満たす熱い白濁汁に、シオンは声にならない悲鳴を上げながら悶絶した。煮えたぎったザーメンが排泄器官を満たし、粘膜壁に染み込んでいく。

熱すぎる精液を思わぬ器官で感じ、全身をビクビクと震わせながら犬耳ヒロインは妖しい肉悦の前にまたしても絶頂を迎えてしまう。

「うわぁ、そんなところでもイッチャうんだぁ。ねえねえ、それでも自分は感じてないなんて言えるの？ あはっ、もう聞こえてないかなぁ？」

尿道とアナルを犯されアクメを迎えてしまったシオン。精液触手を頬張った顔は涙と白濁液でみっともなく汚れてしまっていた。潤んだ瞳に光はなく、プリムラの言葉にも反応を示す様子はない。

視線を下げれば、アナルに注がれた大量の精液のせいで滑らかなお腹はまるで妊婦のように膨れ上がってしまった。既に何度も絶頂を迎えてしまっているにもかかわらず、胸や口、尻穴や尿道を犯す触手は絶えずシオンの身体を嬲り続けている。



この続きは製品版をご購入の上、
お楽しみください。

編集・発行

株式会社キルタイムコミュニケーション

〒104-0041 東京都中央区新富1-3-7ヨドコウビル

TEL03-3555-3431 (販売) / FAX03-3551-1208

※本作品の全部あるいは一部を無断で複製・転載・配信・送信したり、ホームページ上に転載することを禁止します。本作品の内容を無断で改変、改ざん等行うことも禁止します。また、有償・無償にかかわらず本作品を第三者に譲渡することはできません。

©KILL TIME COMMUNICATION Printed in Japan

<http://ktcom.jp/>

ライトノベルのドキドキじゃ満足できないアナタに送る官能小説雑誌!

妄想最前線を疾走する非現実系・不思議Hコミック誌!

正義感に燃える少女達をたっぷり陵辱! ヒロインのピンチ満載!!

【偶数月】
隔月発売
2-4-6-8-10-12月

【奇数月】
隔月発売
1-3-5-7-9-11月

【電子版】
毎月配信
書籍版は奇数月
発売!



二次元
**ドリーム
マガジン**
2D DREAM MAGAZINE

コミック **COMIC
UNREAL**
アバババ

正義の
ヒロイン
**SEIKEN
FEAR FILE**

あなたのキモチイをお手伝い!キルタイムのアダルトコミック誌
全国の書店・各種通販サイト、およびダウンロードなどで好評発売中!

電子書籍版も
好評発売中!

編集・発行 **キルタイムコミュニケーション**

最新情報は公式サイトへ! **キルタイムコミュニケーション**

検索

〒104-0041 東京都中央区新富1-3-7 ヨドコビル TEL:03-3555-3431 (販売) FAX:03-3551-1208